

かな書き和歌とギャル演歌



先日、高専や工学系大学の先生たちと学生のコミュニケーション能力について討論する機会を得た。先生方の話では、最近学生の読み書きの力の低下が著しく、日本語検定2級試験に日本人学生が落ちて留学生が合格するなんて状況らしい。学生の対話・対人能力は読み書き以上に悲惨で、究極は友だちもできず学校に来なくなることだそうだ。



知人が短大の非常勤講師をしていて、「授業の中で質問させても学生が手を上げないから、あとで私のケータイにメールで意見を下さいと言ったら、たくさんメールが来た」と言っていた。「女子学生って、ボーイフレンドと上手くいっていないときは、その嫌な気分を、授業中であろうが外に出し放題。不機嫌顔で髪の毛いじってばかりで、とにかく手を焼く」とも言っていた。きっと、こんな子はギャル演歌歌手のような洋服を着ているに違いない(かなり偏見)。西野カナとか聴いて、自分を歌の主人公か西野カナそのものに重ねているに違いない・・・。

ところで西野カナに代表されるギャル演歌は、「会いたい」とか「せつない」とか、もっぱら自分目線で感情を吐露し、歌詞はケータイ小説のような表現であることが特徴らしい。で、そのケータイ小説的表現の特徴は、一文一文が短い、情景描写・心理描写が少ないことだそうだ。・・・歌詞なんてのは、ギャル演歌でなくとも、一文は短く情景描写は少ないと思うが。



紀貫之による仮名序文「やまとうたは人の心を種として、よろづの言の葉とぞなれりける」で始まる古今和歌集は、歌を平仮名表記したことが画期的であったらしい。平仮名を使うことで駄洒落(かけ言葉)なんて表現も豊かになったそうだ。そして、これを境に女性文学が花開いていく。「今どき遣唐使なんてもう白紙に戻しちゃいましょうよー」という気分だった、千年前の日本の出来事。学生が海外留学したがるらないという今の日本社会にどこか重なる。官僚組織が高齢化していたとか、政治がお寒い状況だったとか、就職氷河期だったとか、当時もそんな状況にあったのだろうか？

古今和歌集の恋の歌を現代語訳してみると、「会いたい」とか「いま何してるの」など、どこかギャル演歌的になる。昔も今も恋する心は同じで、当時の人は平仮名遊びで、今の人は絵文字とか数字と記号を並べた暗号表現で、よろづの言の葉を創り出した。相手と感覚が通じ合うことを確かめ喜ぶ行為。かな書き和歌とギャル演歌は似ている？古今、恋の歌はそんなもの？



教育の話に戻る。夏目漱石が明治30年の第五高等学校開校記念日に教員総代として述べた祝辞がある。まだ30代前半だった漱石は「それ教育は建国の基礎にして師弟の和熟は育英の大本たり」と学生に語りかけたそうだ。「教育は国づくりの基本となるものだ。だから、先生が生徒をたまたま道ですれ違った人のように扱ったり、生徒が先生を遠く離れたところにいる人だと思っているようでは教育なんてできないし、そんなことじゃこの国は精気を失ってしまう」と。明治の日本は若々しいなあをつくづく思う。そして、旧制五高の学生は大人だった。

今は、先生と生徒が互いにケータイの向こう側において、師弟の和熟なんてめんどくせーという感じになっている・・・のだろうか。学生目線では、たぶんそれは違う。面倒臭いと思っている先生が多く、生徒をして学ぶ気にさせる力量がある先生が少ないように思う。不機嫌面は態度としては良くないが、授業に出て来るのは救いだ。レポートだって添削してやれば上手になる。けれど先生は、それは大変だ、と言う。・・・今こそ、頑張る先生を応援しなきゃ。